
化学反応

壇 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化学反応

【著者名】

壇 敬

27090E

【あらすじ】

暑い夏に出会った男と女、恋に墮ちてゆく過程は、まるで化学反応のように急速に進んでゆく。そんなひと夏の恋を綴つてみました。

夏は恋の季節。暑い日差しが狂わせる。
かたくなな心が、服を脱ぐようにな開放的になる。
あの時の僕もそうだった。

合コンの延長のような男女が十数人で海に遊びに行つたのだ。
その中に僕はいた。そして彼女も。

彼女は美人だつたが、どこかツンとしていた。
だから男達は群がらなかつた。

近寄りがたかつたのだろう。

体のいい男達は、もつと受けのいい女の子達と、キャーキャー騒いでいた。

僕が来たのは数合わせなのだ。

無理矢理引っ張られただけなので、どうでもよかつたのだ。

周りを見渡すと、十数人いた男女は、僕と彼女を残して、海に行つたようだ。

僕は海を見て、ボーっとしていたが、ふと気が付くと、彼女は僕を見つめていた。

その視線に、僕は釘付けになつた。

彼女は、無地のグレーのワンピースの水着に、オレンジの花柄のパレオを付けていた。

そして、色の濃いサングラスをかけていた。

彼女は、僕の横に来て座った。

「あなたはあつちに行かないの？」

そつ言つて、海にいる連中を指差した。

「んー、あんまり気が進まないんだ」

僕は物憂げに答えた。

「じゃあ、あたしと一緒にね

彼女はひざを抱えて言った。

それから、おもむろに僕の方を見た。

「あたし達、気が合つて、そつに思わない？」

彼女の唐突な言い回しにビックリしたが、そんな素振りを見せない
ように言った。

「そうかもしれない」

心なしか彼女の口元が笑つたように見えた。

彼女はスクッと立ち上がり僕の手を引いて、僕も立つように仕向け
た。

「こんなどいろは出ましょ」

「あたしの車でドライブしない？」

「ああ、いいね」

僕もいい加減うきぎりしていたので、彼女の誘いに乗った。

水着からすっかり着替えた僕と彼女は、駐車場にいた。

彼女は、黒のミニ・コンバーチブルの運転を僕に任せて走り出した。

「どうへ？」

僕はレイバンのサングラスを掛けながら尋ねた。

彼女は海を見つめたまま言った。

「あなたに任せるわ」

「とにかく車を走らせてよ」

「この海風を感じてみたいの」

「OK」

そう答えて、僕はハンドルを握り直し、アクセルをオンした。

「彼女、いるんでしょう？」

「いや、残念ながら」

「そうなの」

「君は？」

「女にそういうことは訊かないものよ」

「じゃ、口説くしかない訳だ」

「ちゃんと解つてゐるじゃない」

しばらく走って、ドライブインに入った。

僕がタバコを燻らせていると、彼女はコーヒーを差し出した。

「ああ、ありがとう

そう言つて受け取ると、彼女の口元に笑みがこぼれる。

「いい感じよ、あなた」

僕はフフンと笑つて言つた。

「どっちが口説かれてんだか」

それを聞いた彼女はフフフと笑つた。

「ホントね

「いいわよ、付き合つてあげても

「それはそれは、光栄の極み」

僕はそう言つて、軽く会釈をした。

彼女には妙に受けていた。

日が傾いて、夕焼けが綺麗な岬で車を止めた。
ふたりで車を降りて、夕日を眺めた。
彼女は僕の方に寄り添つた。

「ねえ、好きになつてはダメ?」

僕はその言葉に驚かなかつた。
むしろ、僕の口から出た言葉が以外だつた。

「ああ、君が好きだよ」

彼女は更に寄り添つてきた。

「嬉しい」

夏の季節に出会つた恋は、熱い。
熱くて刺激的だ。

しかし、季節が過ぎると熱も冷める。
温度が下がると化学反応も止まる。

僕と彼女は……。

酸化（後書き）

よろしければ、読後感想をお願いします。

熱気が残る頃、僕と彼女は、デートを重ねた。

涼しい避暑地で森を散策した。

海辺や高原でのドライブは当たり前だった。

暑い砂浜にたたずみ、海に入つたりもした。

出会った時の、他の男女がしたように。

そう、僕と彼女は特別なんかではない。

僕と彼女は少しだけシャイなだけだった。

僕と彼女は、ひと夏の間は仲睦まじく、いつも寄り添つていた。
甘い言葉やささやきはなかつた。

けれど、それに伴う行動や視線でお互いのことがよく分かつた。

僕と彼女は「クール」だった。

夏の熱気が去り、街には長袖の服を着る女性を多く見かけるようになつた頃、僕と彼女にも少しずつ変化が出てきた。

もちろん、夏のバカ NS 気分も失せて、僕も彼女も仕事で多忙な時期を迎えていた。

彼女との連絡が途切れがちになつた。

当然の如く、逢う回数も減つていつた。

久しぶりにフランス料理の店を予約したのだが、僕も彼女も時間には遅刻、しかも食事中に何度も携帯に会社から電話が入つた。

僕も彼女も、お互いの顔を見合させて苦笑した。

「楽しむ雰囲気じゃないわね」

「ああ、そうだね」

無言で食事を終えて、お互いの会社に戻る始末だった。

秋も深まり、全く連絡し合わなくなつた頃、何かのパーティで偶然、彼女と顔を合わせた。

「やあ」

僕はグラスを上げて、軽くあこがれをした。

「お久しぶりね。お元気?」

彼女は微妙なニュアンスの返事を、まばたきのあこがれと共に返してきた。

「あたし達、もう、終わりなのかしら?」

彼女がそんなことを訊いてくるのは意外だった。

「どうなのかな?」

僕も不思議な返事を返してしまつた。

彼女は目を伏せてこう言った。

「ちょっと残念な感じがするわ

僕もそう感じていた。
だから、こう切り返した。

「『保留』つてのはビリッ。

彼女は顔を上げて僕を見つめた。

「ほりゅうつー。

「そう、電話機の保留機能みたいに
「夏までつながったまま、放つて置くのを」

僕はそう言つて、ウインクをした。
彼女の顔に笑みが戻つた。

「いいわね、それ
「それじゃ、保留中でお願いね」

彼女は満面の笑みでそう言つた。
僕は軽く会釈してこう答えた。

「承りました」

突然、彼女は僕をハグして、僕の耳元でささやいた。

「やつぱりいいわ
「いい感じよ、あなた」

そう言い終わると、彼女は去つて行つた。

温度は下がったが、化学反応が終わつた訳ではない。

また来年の夏、暑くなる。

その時、僕と彼女の反応は……。

暑い季節が、また僕と彼女を狂わせるのだろうか。

平衡

黒髪が肩を超えて伸びた、可愛い少女。色白のスレンダーで、華奢な感じ。清楚な印象で、成績は悪くない。フルートの高音のよくな声で、クスッと笑う。

中肉中背の、じく普通の体格の少年。普通の髪型で、顔の造りに特徴は無い。純朴な印象で、成績は中の下。少し甲高い声が、時々響いたりする。

そんな少女とこんな少年とが惹かれ合つ。惹かれ合つのに理由なんて無い。

そうは言つても、惹かれ合つたキッカケはある。たゞ、こんな印象が最初だつただろう。

「ちょっと、いい感じね」「ちょっと、かわいいな」

時々何かの、ほんの些細なことで、彼女に、彼に、注目する。

彼女の物憂いな表情。

彼の真剣な表情。

彼女の、楽しそうに笑う顔。

彼の、戯けて笑う顔。

大したことがあつた訳でもないけれど、その印象はどんどん深くなつてゆく。

そのうちこ、何でもないことも、彼女のことを、彼のことを、注目してしまつ。

「彼、また笑つてる」

「彼女、微笑んでる」

もう、彼女のことが、彼のことが、気になつて仕方がない。

「あ、彼、こっちを見る」

「あ、彼女、こっちを見る」

時々、彼女の視線と彼の視線がぶつかる。お互いまづくて視線を逸らす。

「彼、何でこっちを見るの？」

「なんか、彼女と田が合つちゃつたぞ」

恋には自意識過剰なところがある。

「え？ まさか、そんなこと…」

「あれ？ ひょっとして？」

同時に、恋には疑心暗鬼なところもある。

「そんなこと、まさかよね」

「それは、それは有り得ないよな

だが、もう既に『恋の虜』である。首までドップリと恋に浸かってしまっている。

彼女を、彼を、見る度に胸がドキドキする。

時々、彼女を、彼を、正視できなくなる。

もう想うことば、彼女のこと、彼のことだけ。そして、心にはこの言葉が響いている。

「彼女が好きだ」
「彼のことが好き」

話すチャンスを作るひとするが、嫌われたくない、印象を悪くしたくない思いで、どうしても勇気が出ない。

「の、もどかしさ。
「の、じれったさ。
「の、いらだたしさ。

「の感情の動きが「恋の醍醐味」とは解からず、その想いを持ち続けたまま、時間だけが空しく過ぎてゆく。胸苦しさとドキドキ感を持続しながら。

そして、偶然の出来事が彼女と彼を結び付ける。例えば……。

「プール掃除の当番に当たった」
「委員会の代表に2人が選ばれた」
「図書館で2人つきりになった」
「部活で遅くなつて同時に校門を出た」
「担当教師に呼ばれたのが2人だつた」

まあ、何でもいいのだけど。

最初は、心臓がバクバクしてお互いに顔さえも見れない。「意味を持った」言葉を言える状態ではない。

こんなシチュエーションの何回目かの時に、事態は急変を告げる

のだ。

「花火大会に行かない？」

「見たい映画があるんだけど、一緒にどうかな？」

「コンサートのチケット、2枚あるんだけど…」

「日曜日は空いてない、かな？」

「今までの「もどかしさ」「じれったさ」そして「いらだしさ」が楽しめないと、恋そのものなんて、とても楽しめない。

彼女が、「クリと頷く。

彼が、OKサインを出す。

その瞬間の高揚感は、言葉に言い表せられない。この一瞬のため
に『恋』という奴は「もどかしさ」と「じれったさ」と「いらだだ
した」を提供している、と想いたくなるくらいだ。

しかし、この“Hypatience”がいいのだ。悩み苦しみ、
そして勇気を振り絞る。

いい結果だけが全てではない。結果がどうあれ、ぶつかってゆく
のも青春だ。

いやあ、恋つてホント、いいモノだ、うん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7090e/>

化学反応

2010年10月10日21時54分発行